

第7回 JCN 現地会議 in 岩手

速記録

【実施概要】

タイトル：第7回 現地会議 in 岩手 ―今を伝え、これからを考える―

日時：2013年7月9日（火）13:30～17:00（予定）※開場 13:00

会場：あえりあ遠野 2階「さくら」（岩手県遠野市新町1-10）

以下、敬称略

開会挨拶

栗田暢之（JCN 代表世話人）

今回7回目を迎える岩手の現地会議、100名を超える方にご参加をいただきまして、ありがとうございます。2年4ヶ月が経過いたしました。ますます風化が進むというかJCNの参加団体も860を数えていましたが、徐々に減少傾向あり、先日800を切ったという状況であります。なぜそういう減少傾向かといういろいろな状況の中で撤退をせざるを得ないという団体や、被災者支援でなかった団体が本来の活動に戻る…マイナスのイメージが付きまといまいますが、JCNが終わっていいのかといえばそうではないと思います。

むしろ正念場はこれからと言いますか、高台移転でありいろんな造成工事が行われている最中ですが、まだまだ2年3年は現状維持のまま待たされている状態という中、むしろこれからが次なる支援に向けて何ができるかと思うのですが、やはり今日のテーマにもある通り「今を伝えてこれからを考える」と、支援の熱が冷めたかというところではなく、私達に寄せられる問い合わせの多くが「今被災地はどうなっているんですか」というもの。それに対して、「こうなんです」とはっきり示して見せるものが見えにくくなっていると思うんです。

皆様がたにおかれましては、今こういう現状なんだということをおそらく伝えていくことや、こうした現地会議も大事にさせていただきたい。おかげさまでこの岩手現地会議に際しては、いわて連携復興センターと災害ボランティア活動支援プロジェクト会議の共催で開催させて頂きまして、そういう意味では岩手県内あるいは全国各地につたえる絶好の機会だと捉えていただきたいと思います。そしてNPO法人メディアージのご協力での会議、生中継で全国に流れているということでもあります。しっかりと伝えるという一方で、こうした場作りをしていくというものは何ヶ月かに1回ですが、ずっと続けていく覚悟であります。次回もその次も岩手で開催しますが、伝えていくことが使命だと考えます。

今日も皆さまのお手元の資料に「『東日本大震災の復旧復興に関する関係省庁・NPO等定期協議』の関係省庁へのご要望を募集しています。」というものを入っておりますが、JCNにおいてはこうした復興の状況に於いて、今どんな国からの支援が必要か、それが予算措置であったり、制度の改革であったりさまざまな要望があると思いますが、それを復興庁なり関係省庁にしっかりと伝えていく。

例えば福島避難者が全国にいる状況について全国の避難者支援センターをつくらなきゃいけないじゃないとか、という要望が来る。そういうのをまとめて連絡する会議を定期的にやるとお約束をいただきましたので、皆様もこういう状況を抱えている。こういうことをしてほしいなど様々なご要望があると思います。そういうものをペーパーにまとめていただいて、JCNの世話団体にシーズという団体がありますがそこがとりまとめて、復興庁と定期的な会合を行う予定で今準備しています。残念ながらJCNの参加団体の皆さんにこのご案内を出していますので、参加されていない団体様からご要望をいただくときには、集約しきれませんので、ぜひJCNに加盟していただきまして、要望を事務局までお届けいただけますと、確実に関係省庁にお届けします。

岩手で起こっている問題が宮城や福島で関係ないかといえばそうではないと思います。3県が抱える課題は共通項もありますので、見出しながら風化がすすむことに「冗談じゃない」としっかりと関係省庁や全国の支援したいと思っている方に届けたいと思います。今日は様々なところからゲストをお迎えして活発な議論がされると思います。そういった声に耳を傾けて、一日も早い復興復興につながるようお願いしましてこの会を始めたいと思います。本日はよろしく願いいたします。

佐野 淳 氏（岩手県復興局生活再建課 総括課長）

皆さんこんにちは。岩手県復興局生活再建課、佐野と申します。第7回JCN現地会議 in 岩手の開催にあたり一言、ご挨拶を申し上げます。本日お集まりの皆様はじめ、県内各地はもとより国内外のNPO/NGOの皆さんのご支援をいただいて今日にいたっております。この場をお借りしてあらためて感謝申し上げます。東日本大震災・津波の発災からまもなく2年4ヶ月をむかえます。亡くなられた方々、行方不明の方々、あわせまして6千人を超えています。また全壊半壊の家屋が約2万5千棟という中でいまなお3万7千人の方々が応急仮設住宅やみなし仮設住宅に避難されています。

県では復興計画における基盤復興機関3カ年の最終年となる今年を復興加速年として、基盤整備を加速し、被災地の復興被災者の生活再建を一日でも早く成し遂げられるよう事業を展開しているところですが、復興を加速させるための様々な課題もございます。まずは膨大な事業を推進させるための専門的な人材の確保、被災地のニーズにきめ細やかに対応することができる柔軟な財源の確保、事業用地を円滑に確保するための手続きの抜本的な簡素化が必要であると考えておりまして、今後とも国や市町村とともにこれらの課題の解決を図りながら一日も早い復興の実現に向け取り組もうとしています。

そのような中で被災者の皆様の中には新しい仕事についたり、あらたに自宅を再建されたり、災害公営住宅への入居が始まっておりますが、本格的な復興はまだ緒についたばかりであり、長期間に渡る応急仮設住宅などでの生活のなかで、これまで以上にきめ細やかな支援が必要になっております。岩手県復興局の生活再建課では被災者の皆様にこれまでも義援金や生活再建支援金の支給、仮設住宅の供与、相談支援体制の強化を行ってきたほか、本年5月には各種の支援制度や相談先をまとめました「暮らしの安心ガイドブック」の取り組みを進めて来ました。

被災者支援業務をすすめるにあたりNPOの皆さんの柔軟な発想と行動力に助けられている部分も多く、皆さんと連携した取り組みの重要性を常に感じています。引き続き皆様のご支援・ご協力をお願い致します。本日はよろしく願いいたします。

テーマ1「被災地の今」今、抱えている課題

被災者の視点から今、抱えている課題を語る。

釘子 明 氏（「陸前高田被災地語り部」くぎこ屋）

こんにちは釘子と申します。私は被災地で内閣府の起業支援金で起業している。具体的には語り部事業という形で、語り部をしながら防災や安全安心なまちづくりのために活動している。

（ビデオ映像）

公園づくり、集会所を歩いていける場所を作っていただきたいと思います。昨日高田第一中学校に、長島復興大臣政務官がおとずれた。住宅再建の消費税の免除の要望を出した。陸前高田5000名の署名をみつめて渡した。給付金という形で応えたいとコメントがあった。ありがたい。

高田松原をまもる会があるが、砂浜がなくなりほしくないかを見てきた。砂浜を一部残す予定とのこと。最後に、皆さんには被災地にまず足を運んでいただく、そしてお金を落としていただく、そのことによって仕事づくりができる。ぜひ一度被災地のほうに足を運んで見ていただくとありがたい。

瀬浪仁志 氏（公益社団法人助けあいジャパン）

皆さんはじめまして。今紹介いただきました。復興のかけはしプロジェクト、助けあいジャパンの瀬浪と申します。現地会議に参加するのは初めてなんですが、壇上から話すことも初めてです。緊張していますが、自分なりに話したい。私の紹介を、昨年まで宮古市の狩屋地区の高齢者介護・デイサービス。居宅介護支援事業所の愛福祉会で施設長をしていた。自宅は宮古の鯉ヶ崎地区だったが、津波で自宅が流出した。そういったこともあって震災についてはいろいろ考える所あって、仕事をやめて今年4月から今の所属になった。発生当時私は母の受診付き添いで盛岡にいた。病院の中で地震にあったが、自宅の状況はわからなかった。勤め先のことも心配だった。地震の時直接そこにいたわけではないし、その後も妹の自宅に身を寄せたり、みなし仮設が早く見つかったりして幸い避難所生活もしなかった。そういった意味では負い目があった。

被災地の今ということで宮古でも田老地区など、被害を受けた。私の関わっている地域の話をしたい。スライドは宮古市の資料ですが、土地の買取についてはアンケートが行われて結構買取の希望者が多かった。想定していた面積よりも買取希望だった。4.3ヘクタールの申し出から1.7ヘクタールの契約になった。資金の部分で課題も出てくると思う。鯉ヶ崎地区の土地利用計画図。私の自宅の土地は買取にはならなかった。やはり考える。家を建てようかどうか悩んでいる。災害公営住宅も平成27年に完成、区画整理は28年の3月で完成予定。実際に建てられるのは4年後くらいか。ほかも同じか？仮設住宅の生活問題などまだまだ山積みの状態。建物移転から登記とか…長い年月にわたってまだまだこれから自宅再建・地域の再建、長い年月が必要。支援も必要。

（宮古の高齢者介護を扱った映画の予告編の動画）

これは震災2週間後に入って撮影されたものなんですが、最後に出てきたのが石巻の「ちょこらい（今の『よってがいん』）」。サロン機能をもった集いの場の風景でした。

地域に必要なものということでお話したい。居場所ということではないかと思う、居場所づくりはこれからのキーワード。さらに大切になってくると思う。皆さんもさまざま活動していると思うがやっぱり介護保険をつかった居場所づくりもひとつの方向性ではないかと。そこに子どもを連れて出勤したり、障がい者を雇用したり、地域の人も寄れる場所をと思う。

設立資金も大事だが、運営していくにあたって介護保険をつかった運営もあるのではと考えている。宮古の中にそういう場所づくりができればと。在宅を考えた時に地域でよいくらしができるお手伝いできればと。私的な部分ですが自分が感じていることをお伝えしました。ありがとうございました。

テーマ2「支援の今」沿岸・内陸・行政の視点から

支援団体や行政の視点から今、抱えている課題を整理し、今後の岩手の支援活動のありかたを探る。

菊池真吾 氏（NPO 法人さんさんの会 理事長）

食事をメインとした団体なので制限食についてお話していく。震災後の状況から現在必要な食の支援についてのお話。なぜ食なのか。毎日口にするものは大事。食べることで介護予防などもできる。震災当時に制限食を食べられなかったという患者さんもいた。

今聞こえる声としては仮設では死にたくない。自立への課題がある。めんどくさいから弁当を配布してほしい。それに簡単に配食サービスを提供できるわけではない。自立を妨げるおそれがある。そもそも自立とは何を言うのか。組織としては専門的なスキルが必要とされる NPO としてその研修が必要だと感じている。また、制限食は被災地だけの課題だろうか。多くの日本人が高血圧や糖尿病など制限食の必要な方々。どこかで震災が起きたらそのサービスは必要になってくる。

田尻

阪神のときはアトピー食が課題になったと認識している。東北では高齢者が多く、制限食が問題となっている。そこにフォーカスした NPO。

菊池

食はもっと広がりがあり、多くの課題がある。岩手県内どこでも配送可能なのでぜひ声をかけていただきたい。

船橋和花 氏（認定 NPO 法人難民支援協会）

「支援の今」というテーマですが、皆さん感じていると思う。課題は一様ではない。外部支援団体の一例としてきてください。難民を支援している団体です。日本に逃れている難民のかたを支援しています。今回東日本大震災で支援しています。2011年4月から陸前高田で支援を始めた。

1) 何の支援か。2) 引き継ぎ・撤退の話。3) 現状課題を話します。 難民支援協会の支援のゴールは2つ。ニーズの減少。支援団体が担っていた役割をになう団体が出てくること。 ボラ派遣、災害 VC 支援など6つの活動をした。「自分も支援をしたい」難民の方の声から始まったボランティア派遣をした。関わった難民さんは200人超。法的支援、紙芝居など。女性支援、地元の外国人女

性のかたの介護資格取得支援など。外部支援団体の課題は「撤退」「地元化」。まず地元にとって継続が必要かの確認。それから「地元化」引き継ぎ。共同相手のちからを引き出せるかが大事。特に2年4ヶ月立っているのに、地元の団体と一線をひくこともあれば、外部としての力を活かそうとも思う。地元の団体の運営支援に力を入れている。市民活動・被災住民の距離が遠く、お金もつかない。

未解決の課題はだれがになうのか。地元の団体が担って継続した課題解決に。何かをカバーするのが今までだったが、これからまちづくりなど大きなテーマになる。どの方向を住民さんが目指すのかをみながら応援することがどの程度できるかが課題。うまく発信してもらうしくみと協力体制。

田尻

2年がすぎて外部からの団体も現地を去って支援の仕方を変えたりする。地域化している課題も増えて、支援しにくくなっているのは岩手だけの減少ではないと思いますが、水害だと引き時はわかりやすいが、震災は難しい。パートナーをみつ得にくい状況で苦労した。新たな事業をつくった団体は引き継ぎができない。トラブルが起きる感じがする。「撤退」というが船橋さん全く関わらないの？

船橋

事業によりますが、全体的には後方で継続応援を模索。5年10年…長く見ながら。コミュニケーションをとりながら。資金的なことでは、外部の支援団体が金をとってきて渡すというのは難しいのでやりにくくなっている。あと情報発信。

田尻

あんまり「撤退」という言葉を使わずに地元を主体化していくとか言ったほうがいいかもしれませんね。

大桐啓三 氏（いわてゆいっこ花巻 共同代表）

私は岩手にいて16年ですがその前気仙沼にいた。家内も唐桑から嫁に来た。震災当日はラジオを聞きながら3時間半かけて陸前高田の山際を通過して気仙沼へはいった。途中自衛隊にとおしてもらったり、東京から消防が来て「すごい国だ」と思った。ガソリン徹夜で入れたりしたので、ひとつきはゆいっこ花巻の活動をしていなかったが、花巻の温泉に避難者を呼ぶことがあって、それが最初の活動。きょうは主に内陸の話を。イベント。仮設住宅に行くとモチヅキさんの「モチボラ」。軽トラで高田から大船渡まで走り回った9万キロ。釜石のトオニというところでドラム缶で焼き芋の写真。総理が写真を持っていった有名な写真。物資を取りに来た人にアンケートをとって、リストを作って重点的に回るようにした。優先順位をつけたり。花巻でシシオドリというのがあって特別に供養の舞をした。2年4ヶ月なのでだんだんサークルとして整備されてきた。はまっ子の会。お母さんたちが手作り品・ごはん作り。畑で作物を作る。花巻を知る会、資料提供。相談会、弁護士さんを入れて相談。りんごの手入れとか…やってもらっている。

一人暮らし、高齢者が多いのでグループをつくって担当を決めてフォローしている。花巻は沿岸と関東地方の皆さんをつなぐというのを全力を尽くしている。失敗もあったがしょげるなどみんなに言っている。顔の見える関係づくり。自立したところからそっといなくなる。とか。どこまで支

援できるかは宮沢賢治精神で「…ハハアレバ」というカンジで自立を妨げないようにやっている。

田尻

大桐さん、沿岸への支援から花巻にきているひとへの支援に変わったきっかけは？

大桐

すこしたってから温泉にきて、帰った方もいるがほとんどの方が残った。物資を配った時にアンケートを配れた。社協さんにも入ってもらって第2回のアンケートをはじめた。

田尻

では大槌町の小國さん。お願いします。

小國晃也 氏（大槌町復興局 復興推進課事業推進班 班長）

勤務13年。避難されている住民の懇談会、町の状況をお伝えするなどしている。大槌町の状況。大槌川と小槌川の間、4000世帯があった。被災後引き波・火災も多く犠牲者も多い。役場職員でも犠牲者がでて我々生き残りです。仮設に暮らしています。大槌町、犠牲者1230人、3133人人口減。最初避難所の支援をしていた。神社だった。宮司さんや町内会長さんと一緒に。限界を迎えている時に花巻温泉で高齢者など連れてってくれて助かりました。だいが温泉で本当に助かった。1000世帯以上、内陸で説明会をしている。仮設、2106戸、町内で48箇所、1000世帯以上が町外に出ている。

復興計画。最初町長がいなくて混乱した。私も元は保健福祉だった。いままちづくりの担当に。23年度の年内には復興計画をつくることを目標に、住民組織をつくって提案していただく形をはじめた。「つぎのオリンピック、自宅で見れるかな？」と思いながら見ていた。なんとか頑張りたい。

一番課題に感じているのは、災害公営住宅。980戸つくる。高齢化率が高いので、自力再建できない高齢者が入る。6000世帯中1000戸公営住宅＝高齢者。10年20年30年…どうなるのか。空きが出たらどうやって維持管理するのか。全部が稼働するわけでない。アンケートをとってはいるがとるたびに変わってくる。その都度支援もかわってしまう。困っている。住宅の支援という意味で、なんとかして大槌町で自立再建してもらいたい。大槌町でも独自資源の現金支給もしている。防災集団移転促進事業。利子補給金がでるとかでないとか。定住促進の施策も考えている。住宅再建を早くするという施策。

田尻

もう少し詳しく。23年度の復興計画にむけて、ほぼ進んでいますか？

小國

進んでいます。住民合意などここからが本番。

田尻

住民がゆれうごいている。外部の団体も地元主体を考える。制度が決まらない、団体の継続性。小國さん「人がほしい」というが、NPOでも人がほしい。地元団体に引き継ぐためには地元団体が自ら資金獲得をしていくしくみをどうするか。ということがないと復興が進んで行かない。次は人・

資金で考えて行きたいと思います。ではテーマ2の登壇者に拍手をお願いします。(拍手)

テーマ3「岩手でできること」全国の取り組みをヒントに考える

全国の地域を盛り上げている取り組みやアイデアをヒントに、岩手においてどのように活用できるのか考える。

田尻佳史 (JCN 代表世話人)

さきほどはどの団体も人の需要がある。活動を続けていくためには継続的な安定的な資金・事業、すぐにはたくさんの企業や寄付もあったが、風化もきこえてしまう。人の心が離れていくと資金も少なくなっていく。どうするのかを聞いてみたい。1つはプロボノ=人、2つ目はクラウドファンディング

多田一彦 氏 (NPO 法人遠野まごころネット 理事長)

いつも応援ありがとうございます。岩手でできること、なんでも必要で、やればなんでもできるんだという環境を作りたい。感じるのは震災前の課題が凝縮されて現地にあると思う。震災だけでなく通常の社会のことを見据えてつくらないといけないと考えている。日本は人口が減っていく。岩手も人口が減っていく。なんでも行政のせいにして解決せずに、民間にも行政感覚が必要でパートナーシップに、一緒に行政をつくっていくことも大事。個々から地域や社会と共同経営者みたいな。生存のために協調していく、具現化する、アクションする。

衣食住と業が大事まごころネットの活動テーマ今年「融合」です。いろんなものが融合して倍以上の力を発揮する。日本の社会では経済でもどんどん下がっていく、人口も下がっていく、労働者・経営者でなく共同経営者の形に、企業と同業他社、職人とIT企業、自分の生存だけを考えているとバランスが崩れてしまうプロボノとかCSRとかも覚悟をしてやっていくことが大事。継続させていく事が大事。プロボノやCSRは間をつなぐのに重要な役割を果たす。

自然エネルギーの活用。風車で発電したものをITや生活に使う。売電しない。床暖房にも。何かあった時にトイレもお風呂も使える。これからのコミュニティこれからのコミュニティ施設はこうあるべきではと思う。プロボノもかなりかかわっている。エネルギーや建築。企業も個人も共同して地域づくりをするにあたって、プロボノの役割は大きい。

田尻

「プロボノ」って言葉分かった人手を上げて…まだわからないですかね(笑)。では吉野さんお願いします。

吉野和也 氏 (NPO 法人テラ・ルネッサンス)

まずは自己紹介を。2011年4月までウェブの仕事をしていた。それから大槌に入って刺し子PJをやった。復興刺し子PJ、売上3000万円を超え、127名がかかわっている。伝統工芸を知らない例でこういうのは初めてのモデル。大槌ブランドを作る。企業との連携。良品計画と連携し、

無印良品に。そのほか、イノベーション東北。Google と連携、現地事業者のかたにウェブの作り方を教える。情報共有会、支援団体が集まって月2回開催。次はプロボノの事例を。最初はプロボノのかたに頼りっきりでした。無償でやってもらっている。

きょう配布したカタログデザインなどもそう、商品企画や、価格設定、流通、商品写真撮影。などプロがボランティア＝プロボノで。コラボ商品は工数がかかる。常時10案件ぐらい動いている。Twitter やフェイスブックの更新もプロボノが、東京での販売もプロボノが、イベントの企画「大槌かもめの贈り物」@東京神保町、喫茶店とのコラボ、ポスター、告知、メニュー、フジロックフェスティバルでの出店も、段取りもプロジロックフェスティバルや AP バンクフェスでの出店も、段取りもプロボノが。

生産管理のアドバイス（売上と見通し販売戦略）もプロボノが。なぜこのような協力体制ができたかという、立ち上げの段階からかかわった。自分たちがオーナーシップを持って事業をしている。手を引けない。などの理由から。ポイントは具体的になににこまっているか発信するところ。力を貸す力や理由・共感がそのプロジェクトにあるか。被災地ではたくさんのかたの協力が必要だと思います。刺し子プロジェクトはウェブマガジンにもでている。

田尻

いまで「プロボノ」分かって来ましたかね？「ボランティア」とどう違うの。本来のプロボノの意味は会社の時間を使いながら会社も認めながらやる仕組み。仕事終わってからやるのはボランティア、会社あげて認めながら協力していくのがプロボノ、この東日本大震災支援をとおしてプロボノの考え方が浸透してきたかなと思います。インターネットで人集まった？会社の支援はありませんでしたか？

吉野

人はネットで集まりました。会社あげてっていうのはなかったです。

田尻

多田さんは？

多田

はっきりいって「プロボノ」って意識はなかった。企業の人と話していくことで、要求をはっきりしていく…みたいな積み重ね。頼んだら思うようにならなかつたら？複数人でしてもらうことですね。コミュニケーションをとおしてそうならないようにする。

田尻

生産管理までやるというのはすごいですけど、お母ちゃんたちはもっと作りたいとか…どうしていますか？

吉野

刺し子さんにはノルマをつくっていません。全体として調整していく感じですよ。現地の PJ が自走できるように手放したいと皆さん言っている。

多田

バトンタッチだと思う。代表も俺じゃないなと思ったらバトンタッチする。そういう切り替えをするのが大事だと思う。調整機能？意識だと思う。何が必要か役割は何か気づかないと人は病んで

いく。次のステップはこれと（いうのではなく）「やっていく」。すると企業も関わってくる。地域から組織の存在の意味を見出していく、「力を貸す理由」を考える。

田尻

「これに困っている」ということを明確にするのは吉野さん、難しいのではないかと思います。でもやらないといけないんですね。やっぱりプロボノの得意分野はある。販売・営業・生産管理、ルートを作ってしまうと継続する。有限性が大事と。では次にお金を確保していくことをお二人からお聞きしたいと思います。

本多智訓 氏（一般社団法人 MAKOTO）

自己紹介を。2006年まで5年間盛岡にいた。MAKOTOは東北の起業家、挑戦者のインキュベーターとしてコンサルティングや投資、プロボノの募集をしている。クラウドファンディングという言葉を知っている人は？（半分）。クラウドファンディングに出したことがある人は？（2人）。クラウドインキュベーション「チャレンジスター」を運営している。クラウドファンディングはお金をあつめるだけでなく、掲載団体の困っていることも集めようというのが特徴。2012年12月にスタート、12プロジェクト。7社目標達成。

困りごと支援。例：石巻でリハビリセンターを建てたい。畑をかしてほしい。福祉用具の協賛がほしい。人材が欲しい。などのうち、用具と畑がきまったりとか。CFサイトはお金が集まったら終わりだが、チャレンジスターはその後の情報発信もしていく。最初はウェブだけだと伝わらないと思い、リアルイベントを企画していた。プレゼン大会をしていた。調査結果。ひとり1万円くらいは支援をしている。（参考）<http://www.challengestar.jp/page/s/p/guide>

田尻

仕組みのユーザとして SEVATAKATA の伊藤さんにお話を伺いたと思います。本多さん、沢山の人が見ないと寄付が集まらない。ユーザはどのくらい？身近な人からあつめるならクラウドファンディングしなくていいのでは？

本多

1日1,000PV、第3者の目線でフォローできる。直接お金で困っているのだからとはいえない。クラウドファンディングサイトを使うといいやすくなるんですよ。

田尻

なるほど、自分のことってなかなか言い難い。そこがメリットですね。では伊藤さん。

伊藤 英 氏（一般社団法人 SAVE TAKATA 理事）

主に2点。「復幸マップ」を作っている。ファンドレイジングについて。震災以前の写真を iPad のマップのアプリで検索すると震災前の写真が見える。市民体育館、震災前・震災後。まわりの建物がなくなっているのがわかると思います。公民館の写真。元は住宅地だった。ここが自宅のあった所、海拔8M くらいのところ。その時大船渡にいて大船渡高校の避難所にいてそのあと自宅のあったところにもどった。何を言いたいのかというと復幸マップで経緯、現状、今後の話をしたい。

震災後にバラバラにお店をオープンしたが、地元の方もわからなかった。神奈川から入った金太

郎ハウスのかたがかいた手書きのマップが好評だった。それを引き継いでリニューアルした。A4で16枚、今月中に発行されます今後、陸前高田のみんなが知っている、認知度を上げる。広告収入。アプリでの展開。まずは地元で認知度をあげることを地道にやる。ファンドレイジングの際につかったムービーがあるので見てください。

(復幸マップ活動の紹介ムービー) http://www.challengestar.jp/project/s/project_id/1

田尻

伊藤さんのところはクラウドファンディングで寄付した人、何人が身内でした？それは、みんなで頑張った？特定の理事が頑張った？

伊藤

8割が身内でした。支援者というタブでウェブで見れます。みんなで事ある毎に「これをやりたいんだ」と周りに話しました。

田尻

私も阪神淡路大震災のときにお店のマップつくったんですよね。それから18年後も同じような活動があって感慨深い。さて4人のかたの人とお金の話、「いかに自分の活動を見える化」するか、それを伝えていく、伝える仕組み。団体の信頼感をだしていく、みんなでやっていくことが大切。

助成金と違助成金と違って単位は大きくないが大切。企業や団体をまきこんでいく。どうやってチャンスに変えていくか。1000円ならちょっとだせるなどか？なんらかの参加の機会をつくっていくことが人や金を増やしていく実践なのかなと思います。ほかに…質問は？ありませんか。時間になりましたのでこれで終わります。4名の方に拍手をお願いします。(拍手)

閉会挨拶

鹿野順一氏 (NPO 法人いわて連携復興センター 代表理事)

第1回から参加していますが、3年目ということできょうお話いただいたこと、最初とは様が変わりをしていきました。本当に実感しているのは自立というキーワード。黙っていて支援を受けられるわけではないです。僕も団体をやっていますがそう思います。

復興はひとくくりではない。3つあると思う。経済の復興、生活の復興、まちの復興。そのなかに、支援による復興、そして自立による復興とあると思う。百万単位の助成金ではなく、数十万を自分の力でというところを突き詰めていくと自立につながるのではないかと思います。次もあるんですよね？ 次回のテーマで、また今ここにいる皆さんと一緒に語りあいたいとおもいます。ありがとうございました。

(終わり)